七姫
うしかみ
おもかげ
六編九冊

へ13
4321
2止

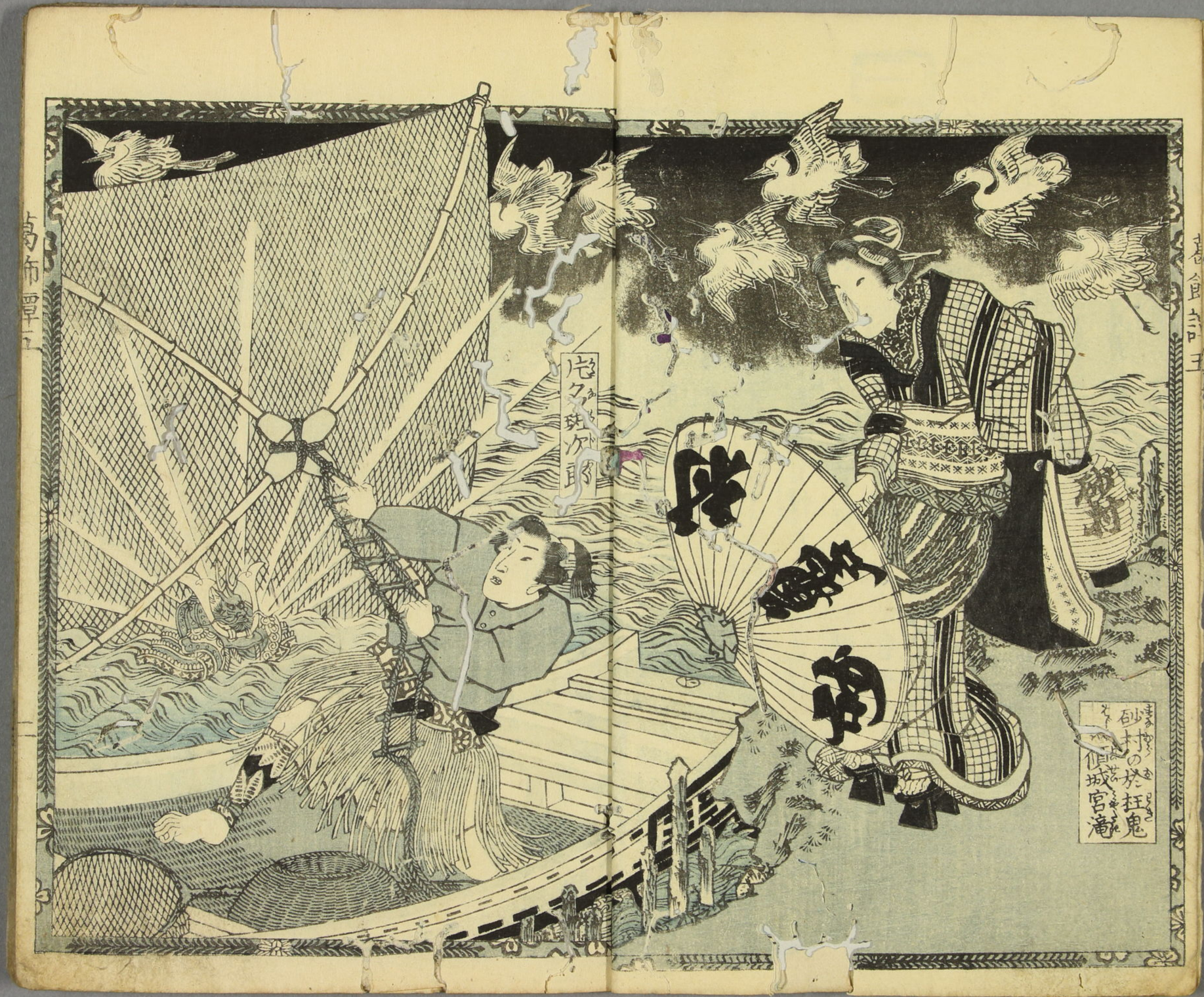
八13
9321
2上
(2002-226)

余程不器用のものかなくしに。近頃流行三題話の社へ入られど訥辯駅舌。解ぬとらえれ〳〵落をとり。又い頃い重人とり云事ありてかりてをり〳〵景物を一ツもとり〳〵にとる物い年の數度手ゐ賜るをたのうぶ取得あて耳順を超ても眼鏡をかけいと自慢ぞろ老る證故もう引込で宜ところわ今年も辭せぬ編物氣ぞ葛飾の七奇胡蝶巻と負出劣らぬよく集ると云問屋の歡悦流行後まの杖郷の作る看棄のそぬぐいき達いさんも茶人と感心一透木の出紀あく出情しと五德の五編もまぐ書ぐ了ぬ自在の竹の一節あ紀書ぶりわ飽たまらで白炭の松と梅初春毎の年玉わ澤山ものあくまくしく

慶應元年乙丑四月稿成

同二年丙寅新春刊行

柳亭種彦


高市覃二
君倉部王
砂打の於狂鬼
倭城宮滝

○二川の旅店にて
梓箸平
須玉より物を

御兎疝積場
御月薬所 せんなりこの粉末
信州上田東山堂製
実母散
新局九尾傳

國貞
五篇下

三
勝矢
本所顔者宮
菖蒲神社
かしこ新年毎迎賀書
筆五躰用下帳稽古著
國貞画

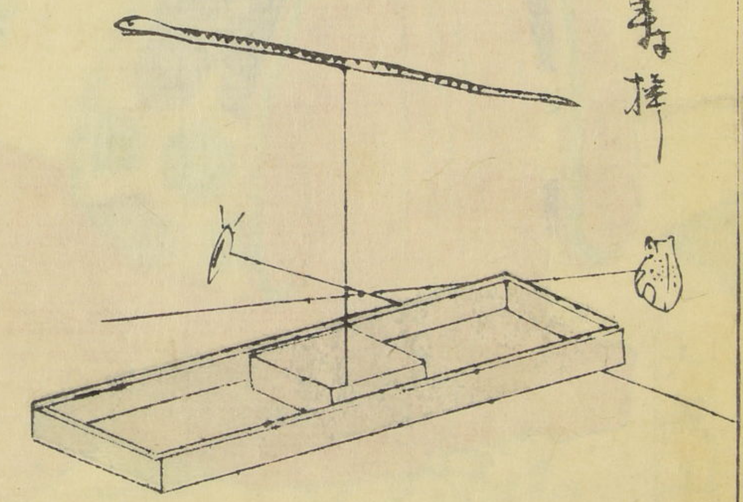
此面の笠平が夢語

七珍萬寶鞆譚　柳亭種彦作　柳亭種彦作　柳亭種彦作
新源氏物語　種彦作　國貞画
偽情愚者物語　種彦作　國貞画
明君忠臣孝子　種彦作　國貞画
童話妙々車　種彦作　國貞画
薄情日記　柳亭種彦作　國貞画

地本双紙問屋　十軒板

六編上

七ふしの
葛飾
六海
を悔
種彦作
國貞画

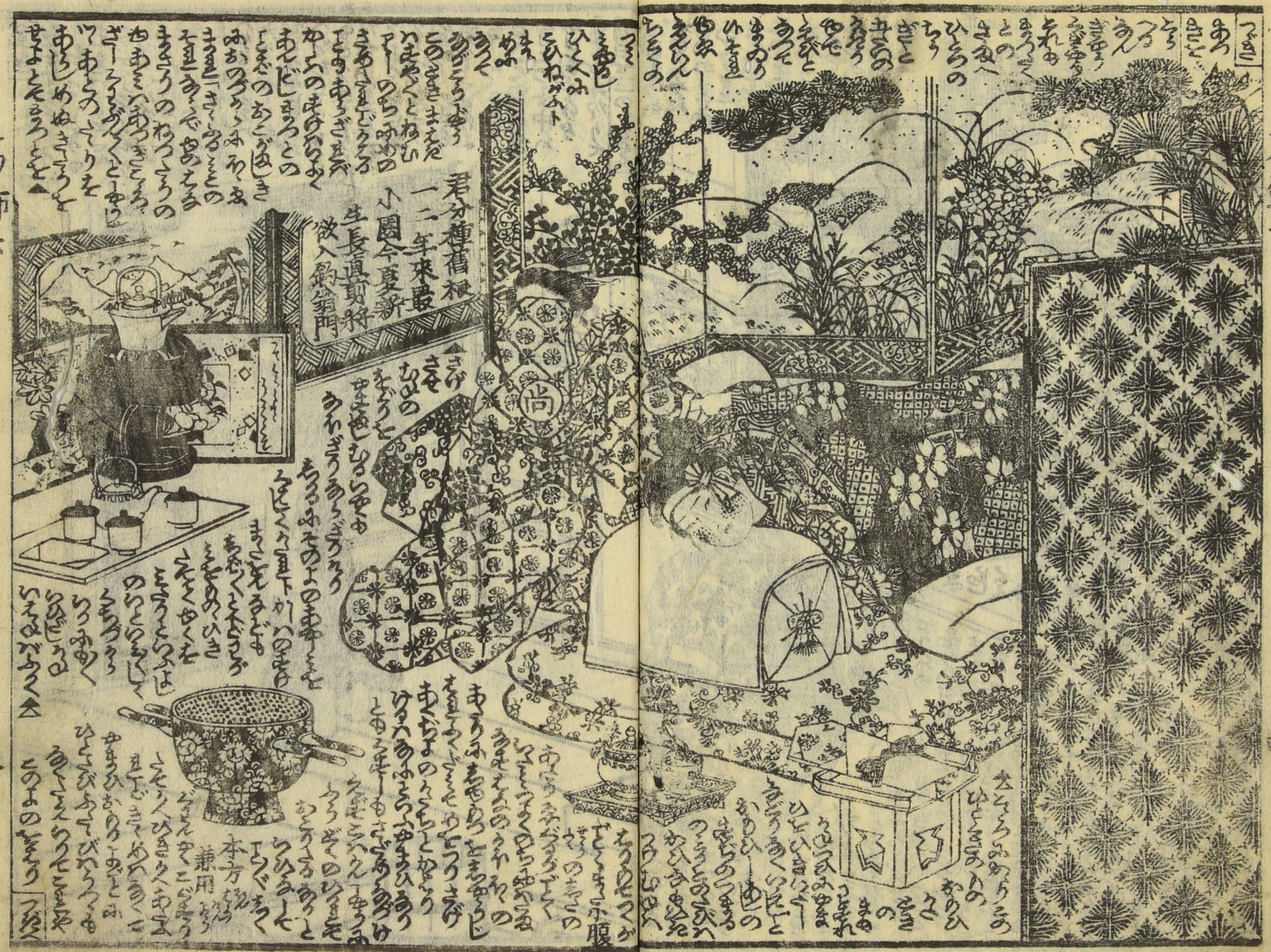


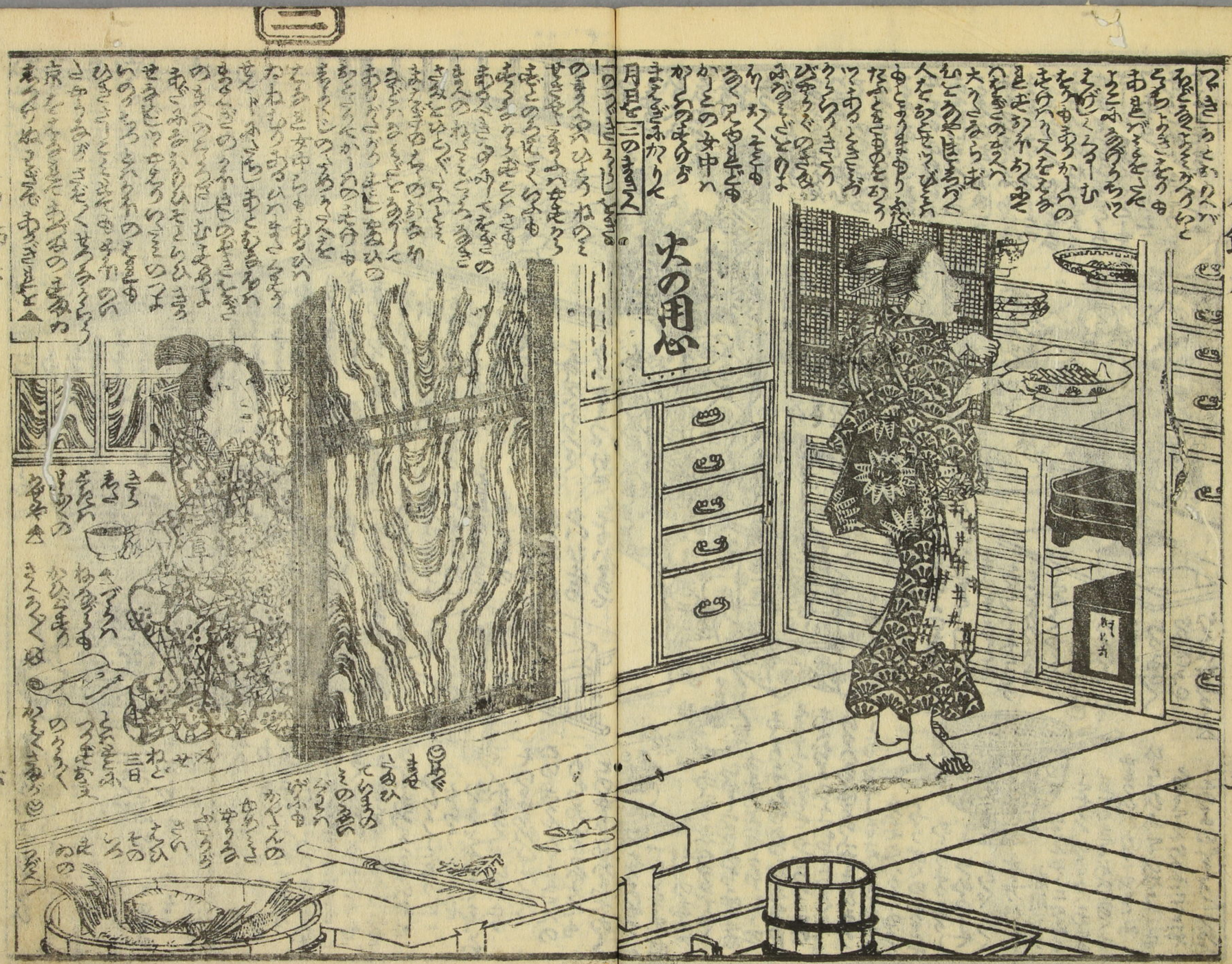
善玉ハ十和の璞ゝ眼无天光輝を見ゞ惡玉ハ欽炮九ゝ觸則ハ躰を損ふ善と惡との懸隔ハ三五夜の王蟾と甲の丸い泥鼈みゝく菎蒻玉ハ磨ても耀ふゞ結櫃形みゝも珊瑚珠ハ貴價一無瑕水精ハ希ふる如く此草子ハ出る人物惡人ハ惡人ゝゝ純粹の善人一人も世態如此ゝゝ抑勸懲の旨ハ有んと問屋も気をのゝ面向不背の珠の如き何処ゝゝ見ても親王と見ゝ立物造立て舞臺をも大きくせよと云も一理と政談ハ落ち趣向の青砥もどゝ東の某と口画み露一此人後々本玉の眼鏡ハ玉と石とを見分る義を今より看客ハも告ゝまゝる序文ゝ

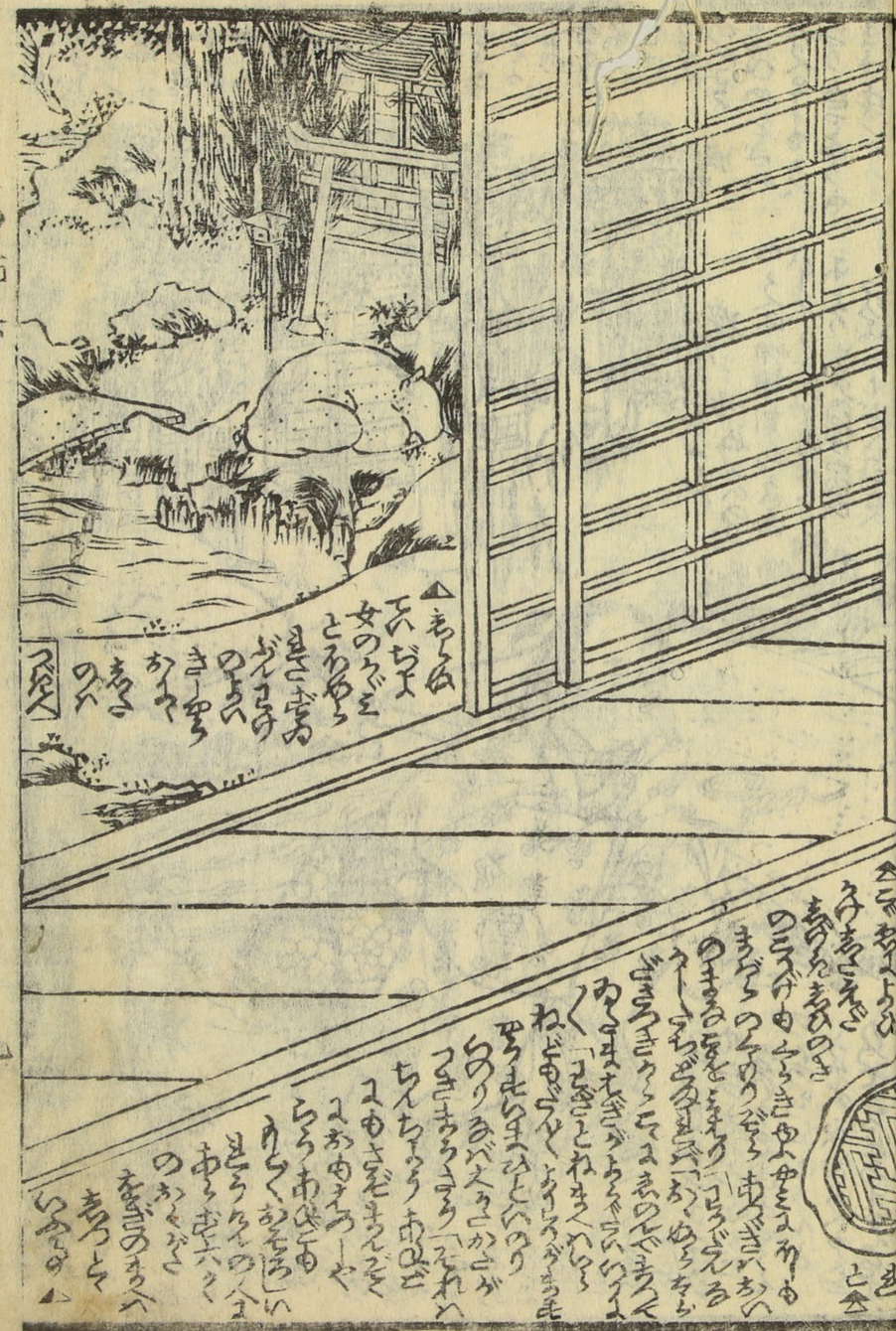
慶應二寅年春刊行

柳亭種彦

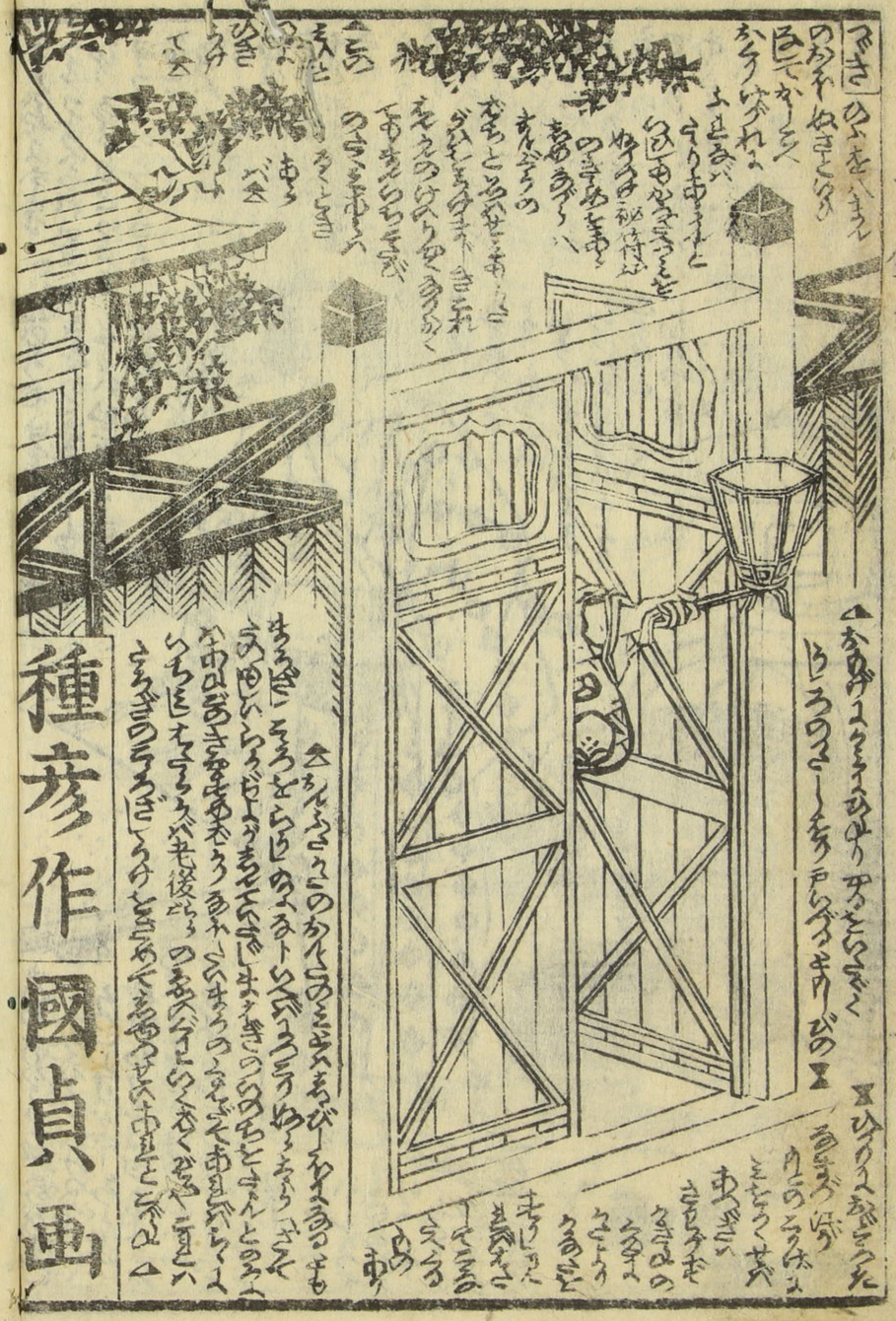
六郎左門
妻
金室町
了髪
林々
東六郎左衛門尉常明


君分種舊根
一二年來最
小園今夏新
生長直貫將
欲入叡覽門


大の用心



厚
清



種彦作　國貞画

御免　痔湯

せんきの妙薬

御用薬所　信州上田東山堂製

一包　六十四銅
一貼　三十二銅

本家　實母散

中橋南傳馬町　千葉堂孝輔製

新局九尾傳

當年之内　爲永春水作
自初編至五編　梅蝶楼國貞画

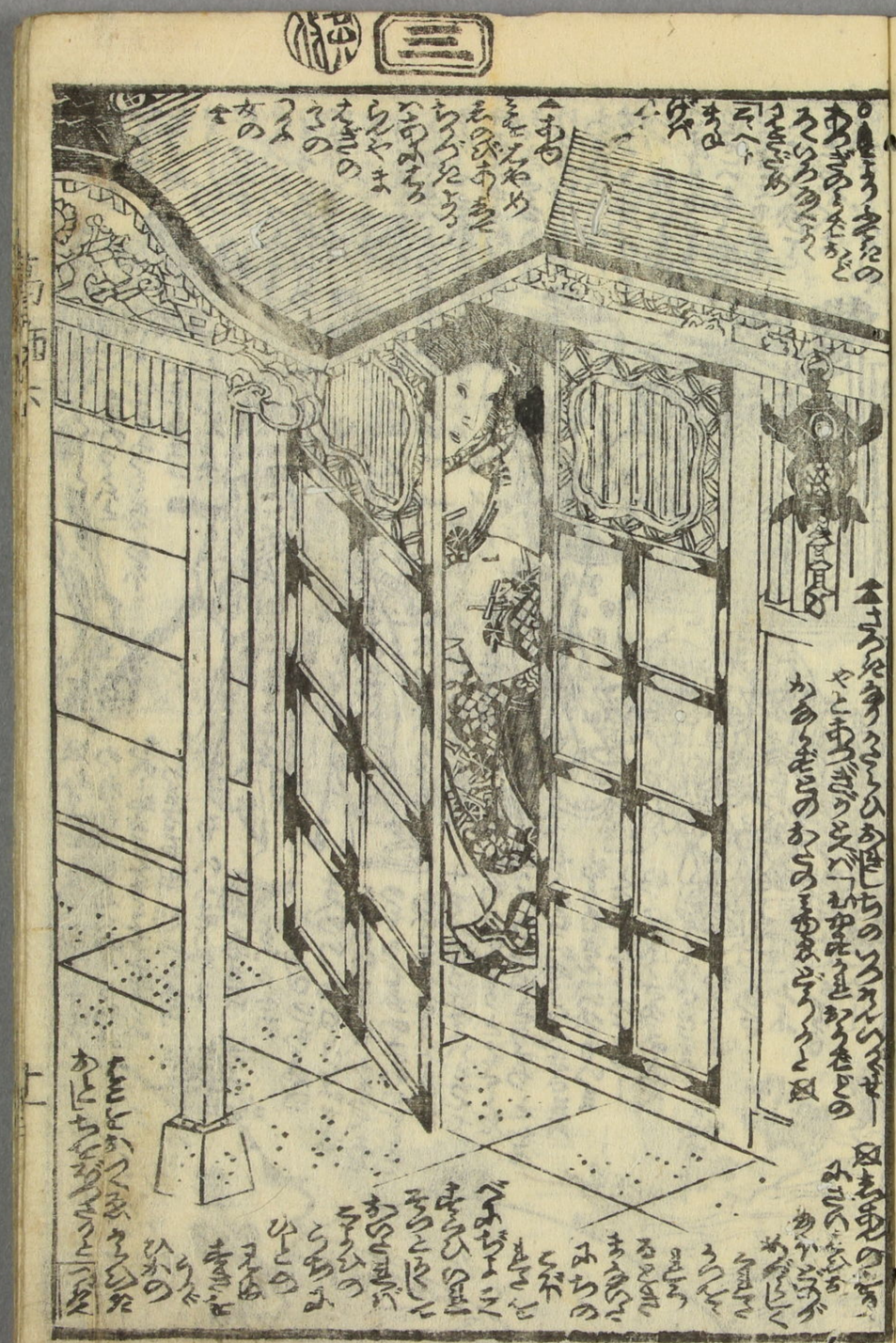
初篇は鎌倉の管領持氏朝臣那須野の狩倉に起り妖婦玉面の色香に迷ひ二人の愛妾操崖と亡ぜんとす弱き持氏の餘り玉面の謀反を企て執事憲實の直諫を用ひざるの趣き乱行の餘り玉面の妖怪あるを曉り逼りて一笠前の射よ

三篇は結城氏朝十葉貞胤等玉面の其疵口を黙して立昇り九尾士の出現を妨げ萌を変じて変化の現雄一個生まれ

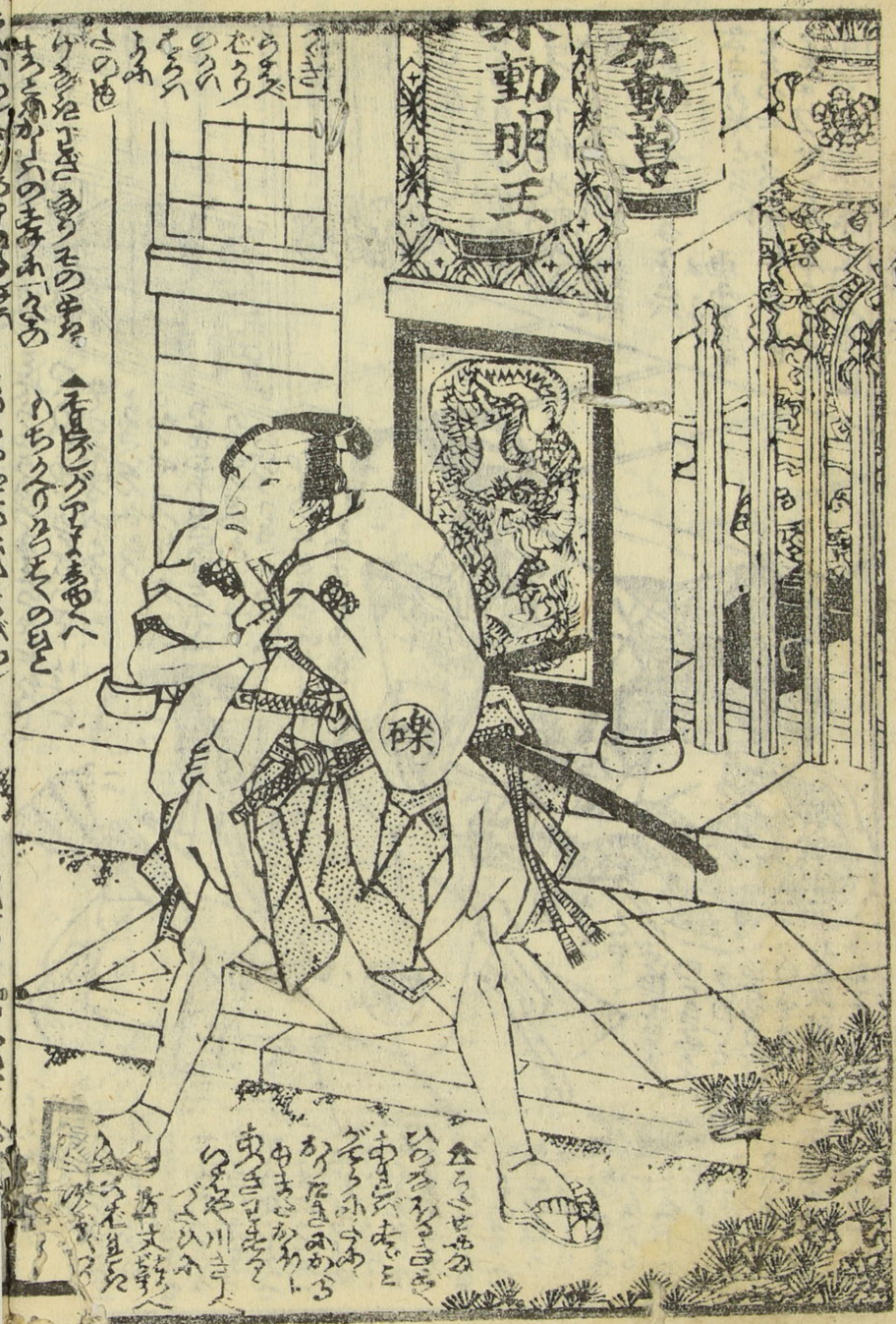
編中九尾性の現雄一個生まれ

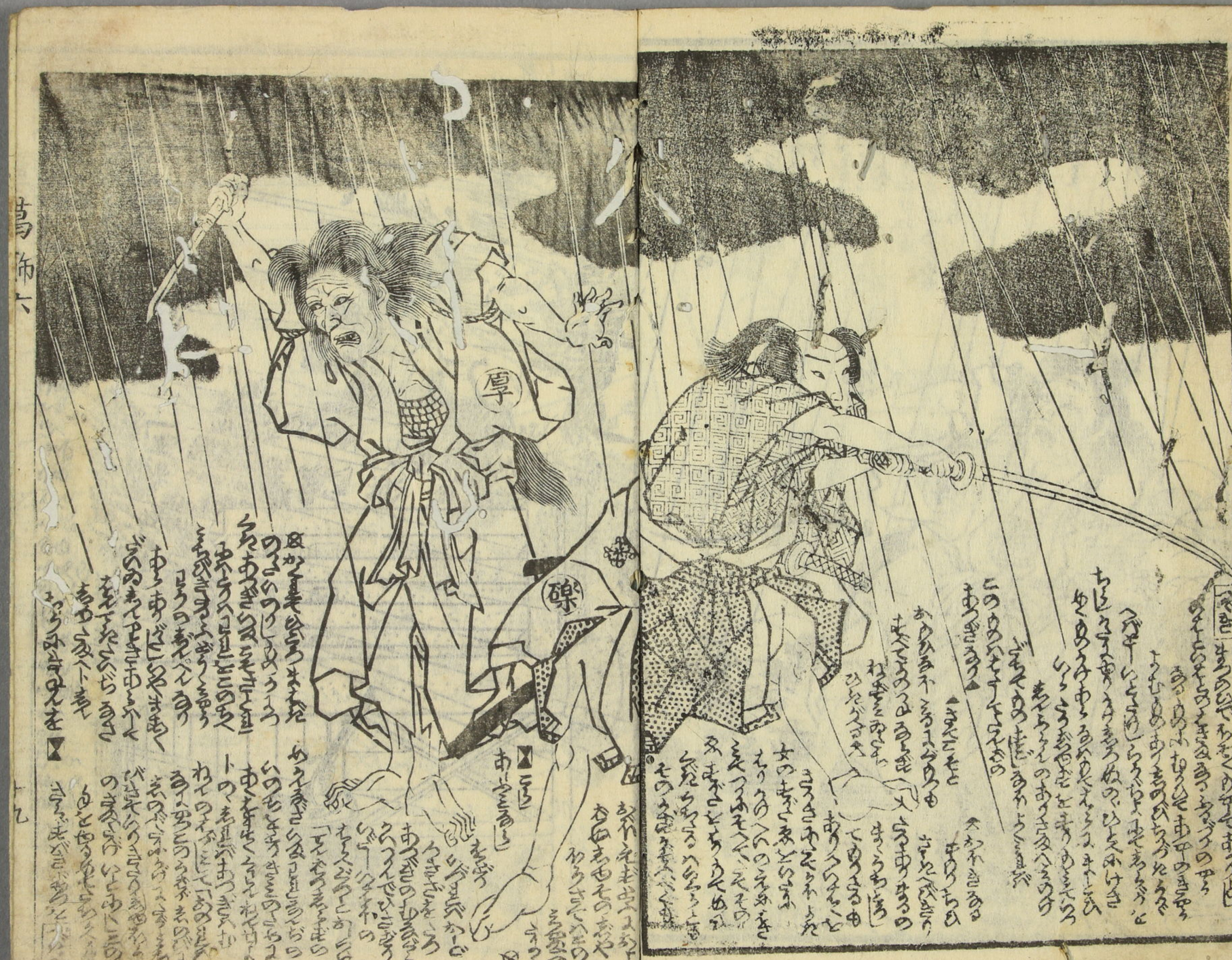
四篇　五篇　引續て出板あるべし

六篇下



膳
早蔵が寛
うる真人が祈祷の
きっかけ赤穂次郎ゴ金
峯寺の住僧と對面
の処の余紙
梅木男爵
学
樂


不動尊
不動明王
磔


厚
礫

慶應二年丙寅陽春開板標目

七福神宝船譚 五編より八編まで 柳亭種彦作 梅蝶楼國貞画

室町原太平記巻 八篇より九篇まで 種彦作 十篇 十一篇 國貞画

偽名情談想哇者 四編 如皐作 大尾國貞画

筆海西國聞書 十編 十一編 種彦作 國貞画

明鴉墨画西縞福 十一編 十二編 十三編 種彦作 國貞画

童謡妙々車 廿一編 廿二編 種彦作 國貞画

花封巻日本章 十編 種彦作 大尾國貞画

薄雪太日記 十五編 十六編 十七編 春水作 國貞画

八犬傳犬の双紙 四十八編 柳亭録 四十九編 國貞画

地本双紙問屋

南傳馬町壹丁目 蔦屋吉蔵板

教習書海